

待降節第1主日礼拝説教「待ち人来る」

日本基督教団石神井教会 2018年12月2日

【旧約聖書日課】エレミヤ書 33章14～16節

¹⁴見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。¹⁵その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。¹⁶その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう。

【使徒書日課】ヤコブの手紙 5章1～11節

¹富んでいる人たち、よく聞きなさい。自分にふりかかってくる不幸を思って、泣きわめきなさい。²あなたがたの富は朽ち果て、衣服には虫が付き、³金銀もさびてしまいます。このさびこそが、あなたがたの罪の証拠となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くすでしょう。あなたがたは、この終わりの時のために宝を蓄えたのでした。⁴御覧なさい。畑を刈り入れた労働者にあなたがたが支払わなかった賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人々の叫びは、万軍の主の耳に達しました。⁵あなたがたは、地上でぜいたくに暮らして、快楽にふけり、屠られる日に備え、自分の心を太らせ、⁶正しい人を罪に定めて、殺した。その人は、あなたがたに抵抗していません。

⁷兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い寒りを待つのです。⁸あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。⁹兄弟たち、裁きを受けないようにするためには、互いに不平を言わぬことです。裁く方が戸口に立っておられます。¹⁰兄弟たち、主の名によって語った預言者たちを、辛抱と忍耐の模範としなさい。¹¹忍耐した人たちは幸せだと、わたしは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。

【福音書日課】ルカによる福音書 21章25～36節

²⁵「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。²⁶人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。²⁷そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。²⁸このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」

²⁹それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。³⁰葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。³¹それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。³²はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。³³天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

³⁴「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罨のようにあなたがたを襲うことになる。³⁵その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。³⁶しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

アドヴェントの装い

聖壇には、今日から「アドヴェント」のロウソクが灯りました。「待降節（アドヴェント）」の四週を意味する四本のロウソクは、この期節が悔い改めの祈りのときであることを示す「紫色」が三本と、来るべきものを迎える喜びを先取りする「バラ色」が一本、立てられています。そして、中央には五本目の「白色」のロウソクが加えられて、この期節の先に祝う「降誕祭（クリスマス）」にお迎えする幼子が、栄光に輝く王、万軍の主なる神に等しいお方であることを、わたしたちに教えてくれています。

今日、教会においでの方々は、朝、会堂入口に大きなリースが飾られていたのをご覧いただけただけでしょうか。今日からのアドヴェントに合わせて、昨日、奉仕者がお持ちくださり、掛けていってくださったばかりのものです。それに先立って、先週は平日の午後、教会の一室で、クリスマス・リース作りをする方たちの集まりがありました。教会の皆さんだけでなく、普段教会においでにはなされていない方がこの機会と一緒にリース作りを体験しよう加わってくださっていたようでした。今週も、第二弾の集まりが予定されています。

アドヴェントを迎えて、教会は、少しずつクリスマスに備えた装いを始めています。1階では、今日からクリスマス・ツリーの準備も始められているはずです。アドヴェントは、クリスマスを迎える準備のとき。そのことを、少しずつ進められていく装飾によって、わたしたちは実感します。もちろん、装飾だけではありません。クリスマスの祝いの礼拝のための準備も始められています。子どもたちはページェント礼拝への備えを始め、わたしたちも、音楽奉仕者をはじめとした礼拝奉仕の備えを始めています。皆さんにも、クリスマス礼拝の案内チラシやハガキをお持ちいただき、ご家族や知人、周囲の方々をお誘いいただくという、大切な備えの役割を担っていただかなければいけません。アドヴェントは、クリスマスの祝いのための準備期間。わたしたちは、実際に、そのようにして、この期節を過ごしていくことになるでしょう。

もちろん、アドヴェントは、「紫色」が示すように、祈りのときです。「バラ色」が示す来るべき喜びを思い描きながらも、なお、その前に心静まって祈るために設けられてきた期節です。

かつて神学校を卒業してすぐに赴任した大分の小さな教会での一年目に、アドヴェントの期間、主日礼拝とは別に日曜日の午後、特別な祈りと讃美の礼拝をしたことがありました。クリスマスを取らずに、アドヴェントの御言葉と祈りに徹したいと準備した礼拝でした。残念ながら、二年目以降は、いつのまにか近所から集まるようになっていた子どもたちのためのクリスマスの準備に追われて、アドヴェントの祈りの礼拝は自然消滅してしまいました。それ以来、アドヴェントの特別な礼拝をしたことはありませんが、イースター（復活祭）の前のレント（受難節）の期節に行なわれるような静かな祈りのときを、アドヴェントに、できれば平日の夕べに、いつかはできるようにしたいと、今でも秘かな願いを持っています。

「主が来られる」

アドヴェントの最初の日曜日、聖書日課はいずれも、主が来られるときに備えよ、と呼びかけています。

旧約の時代、エレミヤをはじめとする預言者らは、主なる神を忘れ、蔑ろにし、我が道を生きようとする人々に、主が来られる日の訪れを、預言して語りました。多くの人々は、悲惨な現実を前にして、なお自らの力に頼り、自ら将来を切り拓くことに腐心し、しかし、互いに争い合い、足を引っ張り合い、自滅の道を選んでいました。預言者らは、人が神を思い起こし、自らの主導権を明け渡して神が神としてお立ちくださるのを待つべきことを、繰り返し教えたのです。

主なる神を知り、自らの生きる場にお迎えするならば、「**主は我らの救い**」となつてくださる。そう預言者らが告げたことを聞き入れた者は、多くはありませんでした。主なる神が本当に自分たちのもとにおいでくださると言われても、ほとんどの者には、分らなかったのです。ましてや、その神が、人の姿をして、しかも幼子の姿で、わたしたちのただ中においでになられるなどとは、だれにも想像できなかつたことでしょう。

アドヴェントの先にクリスマスを迎えようとしているわたしたちは、神が人の姿をとられて幼子としておいでくださったということ、それは、ヨセフとマリアという夫妻のもとに生まれイエスと名づけられた方だったということ、当たり前のように語り、そのことを祝おうとしています。キリスト信者でなくても、クリスマスがそのことを祝う祭りであることは、多くの方がご存知でしょう。

それは、およそ二千年前の出来事でした。かつて預言者たちが告げていたこと、「主が来られる日」は、まさにクリスマスの出来事として実現したのだと、主イエスに従っていた弟子たちの教会は、信じて宣べ伝えました。それは、不思議な出来事として物語られました。どこか夢物語のような、しかし、わたしたちの心の奥底に語りかけるような物語として、幼子イエスの降誕物語は、教会で語り継がれてきました。教会の暦の中に「降誕祭」として位置づけられ、毎年繰り返し、語り直されてきたのです。わたしたちもまた、間もなく迎えるクリスマスに、まったく同じ物語を語り直そうとしています。

ところで、今日、聖書日課として与えられている御言葉は、その降誕物語の始まりを語っているわけではありません。「主が来られる日」は、二千年前のあの日、すでにわたしたちの世界に訪れた。そう物語りながら、一方で、弟子たちの教会が、なおもう一つのこととして語り続けたことが、ここでは告げられているのです。主イエスが御子としておいでくださったことを信じるわたしたちは、次に主が来られるときに迫っていることをわきまえ、そのときに備えて生きるのだ。主が来られた日に、狼狽えることなく、しっかりと主の前に立つことができるように、いつも目を覚ました者の生き方、主を心に憶えて祈り続ける生き方を、していくのだ。そう、主イエスご自身が教えられたこととして、語ったのです。

クリスマスを迎える備えのとき、アドヴェントに、教会はそのことをも聞き直してきました。わたしたちも、使徒書と福音書でそれを聞いたのです。

戸口に立つ人を迎えよう！

実のところ、クリスマスを迎えるとき、わたしたちの頭の中は、どこか混乱しているようです。二千年前に家畜小屋で生まれたという方を、今お生まれの方のように迎え、祝うというのですから。もちろん、わたしたちは、主イエスのご降誕を祝うときに、キリストが今年もあらためてお生まれになるというような儀式をしようとしているわけではありません。古い時代、太陽神を崇め、冬至の祭りをした人々は、その祭りの儀式の中で、古い太陽神が死に、新たな命を得た太陽神がお生まれになると信じたといいます。わたしたちは、そのような祝いをクリスマスにしているわけではないのです。

それでも、わたしたちは、なお、クリスマスの祝いの中であの降誕物語を語り直すでしょう。あたかも、幼子イエスが、この年のクリスマスにお生まれになれるかのように、わたしたちはあの物語を語り直します。それは、そのようにしてこそ、わたしたちは「主が来られる日」を迎えることになるからなのです。

神がどのような姿で人の前に現れてくださるのか。主がどのようなお姿で人の中においでくださったのか。神は、人の姿で、その名も名乗らずに、おいでになられる。主は、幼子の姿で、人知れず、わたしたちのただ中に現れてくださる。わたしたちは、聖書の語る物語を通して、そのことを教えられてきました。わたしたちは、主イエスの教えをも、思い起こすことができるでしょう。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた…。…わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ 25:35~40)。

主イエスが「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人」と言われたのは誰のことなのか、わたしたちは、問い直す必要はないでしょう。自分以外のだれか、わたしたちの他のだれか。そう言えば十分なのではないでしょうか。

今日の聖餐から、準備する杯の数を 99 といたしました。「九十九」と言えば、皆さんには、主イエスがお語りになられた「百匹の羊のたとえ」を思い起こしていただけるでしょう。百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回るだろう。そして、見つけたら、喜んで羊を担いで、家に帰り、人々を呼び集めて、喜びを分かち合おうとするだろう(ルカ 15:4~6)。わたしたちは、主が探し出し、担いで連れて来られた一匹の羊を迎えるために神の家の野原に残された九十九匹なのです。その一匹を迎えるとき、わたしたちは、主をお迎えするのです。

わたしたちは教会の入口を、開け放ちます。わたしたち一人ひとりの戸口は、開け放たれているでしょうか。その戸口の向こうに、主が立っていらっしゃる。一匹の羊と共に、立っていらっしゃる。幼子のお生まれを祝うときは、わたしたちが主を迎え、一匹の羊を迎え、共に立つときです。

目を覚まして、主のおいでを待ちましょう。いいえ、わたしたちの戸口を開いて、迎えましょう、「あなたを待っていました」と迎えるのです。